

ほ乳類

兵庫県は、日本海側の但馬地域から瀬戸内海の淡路島まで多様な地形や気候を有し、ほ乳類の生息環境としても変化に富んでいるため、30種を超えるほ乳類が生息しています。

ほ乳類は人との関わりが密接であるため、その分布や個体数の変動は時代とともに人間活動の影響を大きく受けてきました。特に大型・中型ほ乳類は、古来より資源的な価値が高く、肉・毛皮など生活に欠かせない産物として活用されてきました。

一方、農林業被害への影響も大きく、害獣として扱われる面も少なくありませんでした。大正・昭和初期には、毛皮や肉の需要の高まりによって、狩猟が盛んに行われ分布域や生息数に大きく影響を及ぼしました。第二次世界大戦ごろまでには、本県内におけるツキノワグマ・ニホンジカ・アナグマ・テンなどのほ乳類は、絶滅寸前まで減少したと考えられています。現在では、その後の狩猟制限による保護政策によって、ニホンジカと中型ほ乳類は分布域・個体数ともに回復し、ほぼ全県に生息しています。

特にニホンジカは、1980年代以降、南但馬地域を中心に個体数が急増し、農林業被害額は平成19年度で3億7千万円に達しています。さらに、シカの高密度化に伴う過度の採食圧は森林内下層植生の衰退を招き、植物相だけでなく、他の生物相へ与える影響が懸念されています。

ツキノワグマは、氷ノ山系（東中国個体群）と円山川と由良川に挟まれた床ノ尾山系（北近畿個体群）に分断して生息しており、現在でも絶滅の危機から脱却していません。しかし、集落への出没など生活被害・精神被害が発生しており、人との軋轢は大きい状況です。

イノシシは、高い捕獲圧にも拘わらず個体数が比較的安定しているのは、高い繁殖力によるものと考えられています。

ニホンザルについては、1970年代に農業被害を理由に、群れ捕獲が強度に行われた経緯があるため、大多数の群れが消滅し、現在では、11～13群ほどが分布するのみです。特に但馬地域には、香美町と豊岡市にそれぞれ1群が生息しているのみで、絶滅の危険性が非常に高い状態です。しかし、群れ数はわずかであっても、集落環境へ依存する傾向が強く、被害の軽減と保全とが極めて難しい状況にあります。

樹上生小ほ乳類（ヤマネ・ムササビ・モモンガ・コウモリ類）については情報が極めて少ないですが、1960年代以降の拡大造林による広葉樹林伐採によって、ねぐらや繁殖に適した樹洞がなくなり、激減

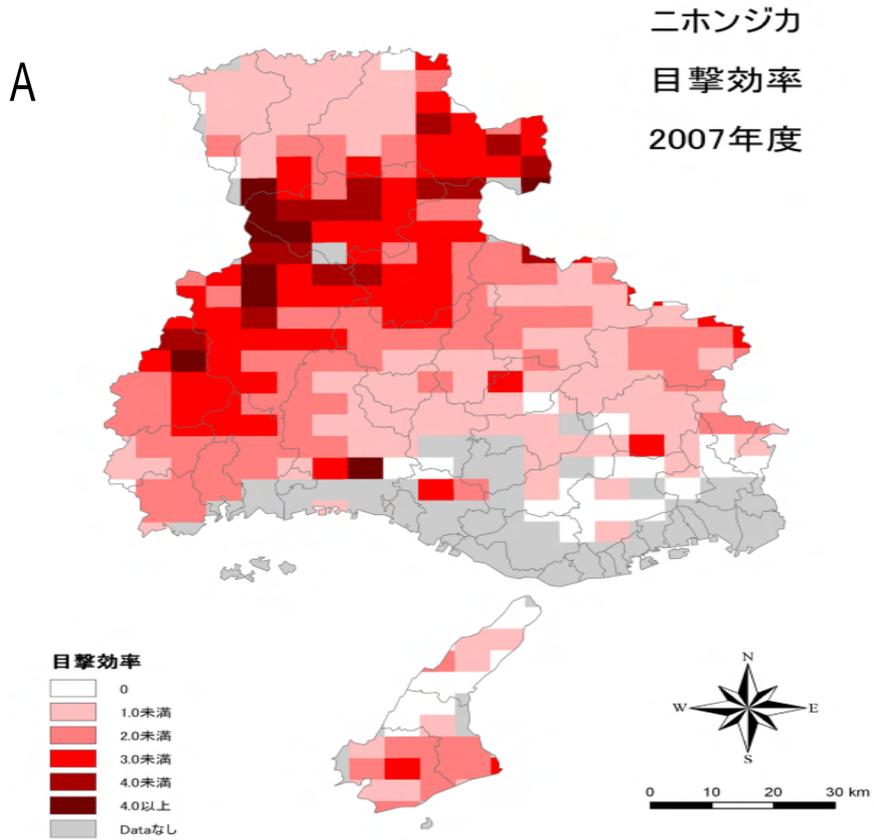
したと考えられており、現在でも生息情報が極めて少ないことから絶滅の危機にあると考えられます。ニホンリスは、分布域が極めて限られており、他地域と比較すると生息数も非常に少ないです。

新たな問題として取り上げられている外来生物としては、アライグマ・ヌートリア・ハクビシンが確認されており、本県固有の生物多様性に大きな影響を及ぼす可能性が高いといえます。

以上のように本県に生息するほ乳類は、現在までに著しく生息数が増加して農林業被害が深刻なニホンジカ、個体数が著しく減少しているものの集落環境への出没が問題となっているツキノワグマやニホンザル、在来生物への悪影響を及ぼすことが懸念されている外来生物アライグマ・ヌートリアなど、生物多様性を保つうえで問題となっている種が多く、保全管理に向けた努力が必要な状況にあります。

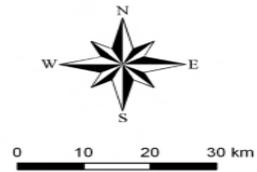
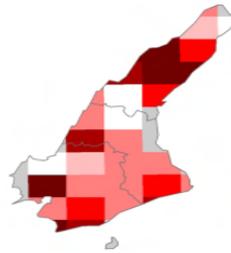
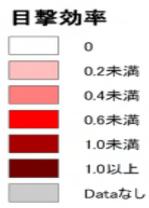
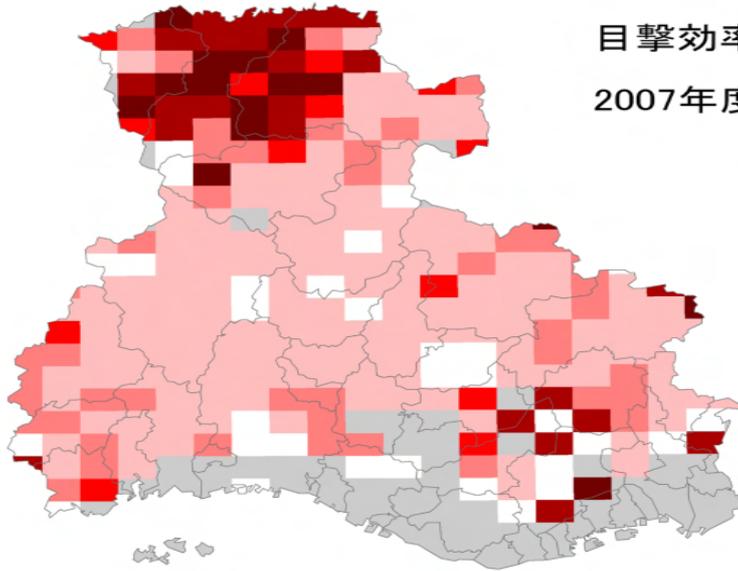
図7 兵庫県に生息するほ乳類の分布図（森林動物研究センター調べ）

- A：ニホンジカ、B：イノシシ：狩猟者による目撃効率(*)をもとに作成
C：ツキノワグマ：非出没年と出没年における目撃情報を示した。
D：ニホンザル：野生群 ～ までは直接観察と行動圏調査による群れの行動圏を示し、餌付け群については餌付け場所を示した。
E：アライグマ
F：ヌートリア：農業被害アンケート調査から得られた目撃情報をもとに作図。



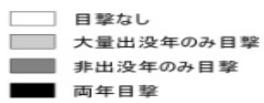
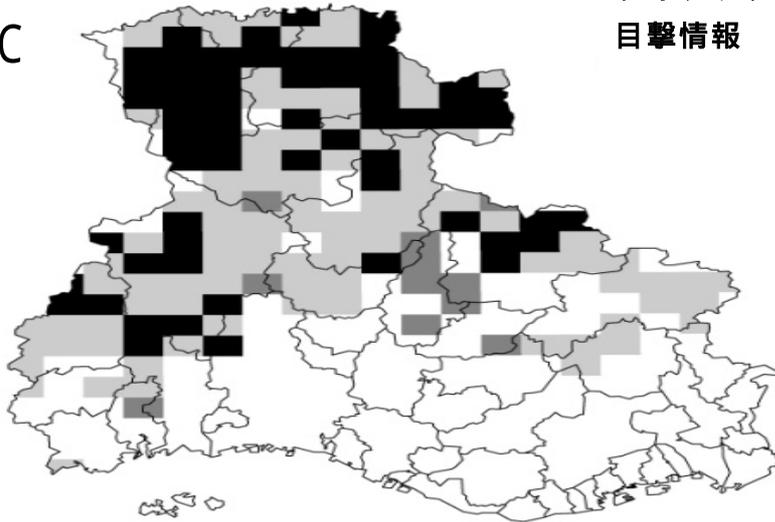
B

イノシシ
目撃効率
2007年度



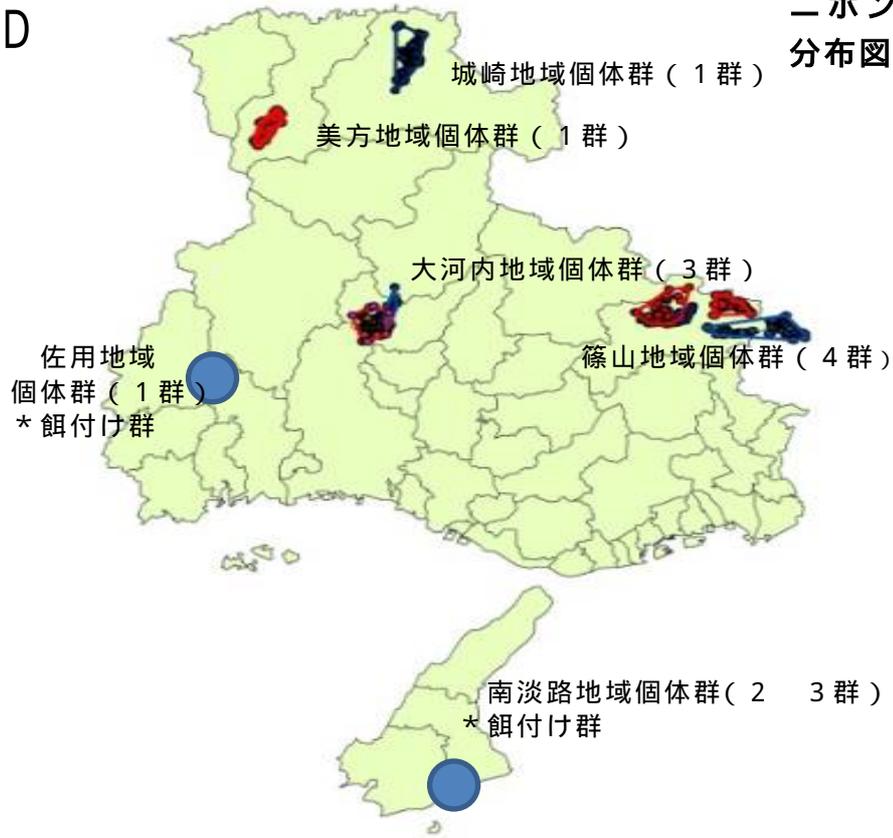
C

ツキノワグマ
目撃情報



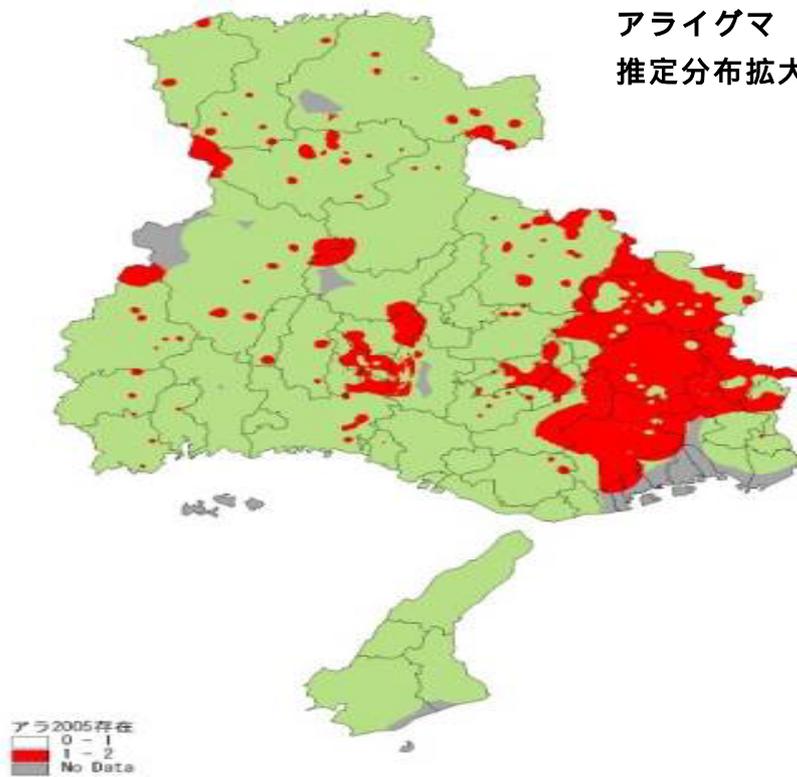
D

ニホンザル 分布図



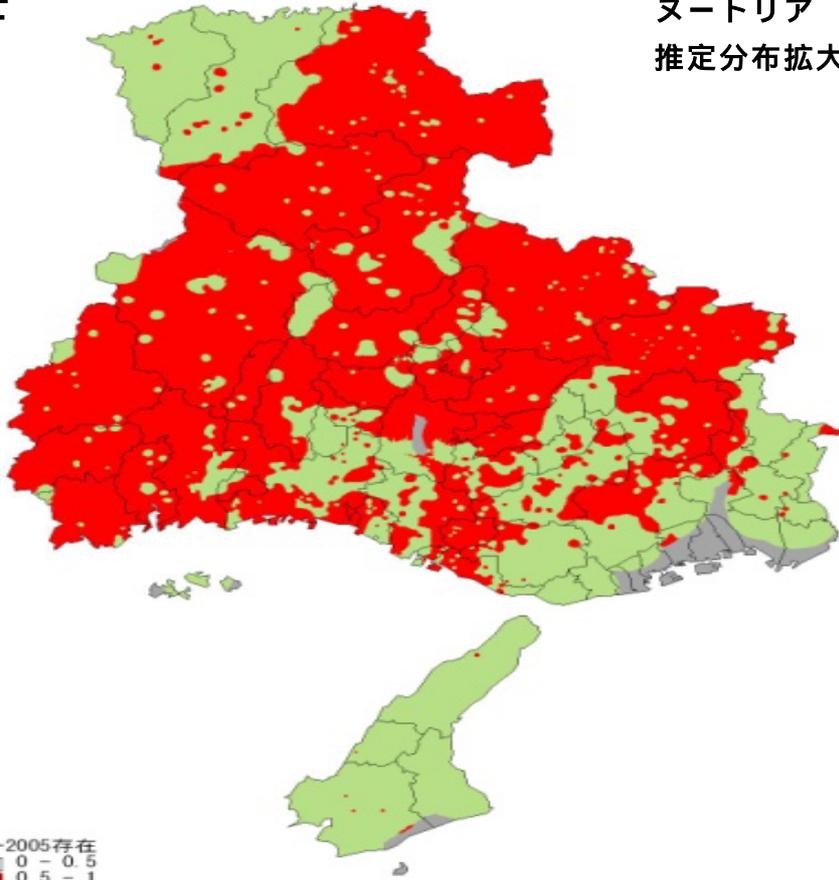
E

アライグマ 推定分布拡大地



F

ヌートリア
推定分布拡大地



ヌー2005存在
0 - 0.5
0.5 - 1
No Data